

平成20年度 学校評価報告書

江津市立津宮小学校

中期目標(今年度の学校経営の重点)	短期目標(具体的な目標)	成果・取組指標(目標達成のための手立て)	自己評価		改善策	学校関係者評価			
			達成状況	評価		考察	評価		
分かる授業の創造に努め、豊かな学力の推進を図る。	①豊かな表現力を培い、ともに学ぶ力を高める学習集団づくり。	○読解力及び言語的表現力の向上を目指した指導方法を工夫する。	・各教科において、読む力、話す力を高める。 ・発表や話し合いの仕方について、型を提示し、繰り返し指導する。	・授業の中で、読み取る活動、話す活動を重点的に繰り返し指導してきたことが、成果として現れ始めている。 ・授業中、よく発表する児童は半数程度である。	B	・読解力及び言語的表現力の向上を目指した指導方法の工夫改善について、研究授業を通して深めて行く。	・自分の意見を的確に話す活動への指導については、「成果」にまでは至っていないのではないか。 ・児童アンケートの結果で授業中よく発表する児童が少ないことや地域の現状を見ると十分達成しているとは言えない。	B	
		○各学級において、ともに学ぶ力を高める学習集団をつくる。	・複数の考え方を伝え合う場を工夫する。 ・ねらいに迫るための話し合いの仕方を工夫する。	・各学級において、伝え合う場、話し合う活動の工夫改善を進めてきた。 ・児童アンケートでは、69%が肯定的である。	B	・ともに学ぶ力を高める学習集団づくりについては、学級経営の取り組み課題として重要視する。	・相手のことを認め、共に生きようとする思いやりについて不安である。	B	
		○少人数授業により、個に応じたきめ細かな指導方法を工夫する。	・一人一人の到達度を常に把握するためのアイテムを作る。 ・単元、小単元別に学習プリントを作成し活用する。	・少人数授業はTTで全学年実施している。個々の習熟度に応じた個別指導を重点的に行ってきた。 ・学習プリントの作成、活用は、児童の学習支援に効果的であった。	B	・TT(チームティーチング)について、その形態、指導方法、内容などに高まりや深まりがあるような授業を追求する。	・「個」を100%掌握することは無理だと思う。 ・先生方の努力には感謝する。 ・これからもたくさんの方々の目で、多角的に子どもの様子を観察したり指導したりしてほしい。	B	
	③明確なねらいを持った教育活動の企画と実践。	○算数科を中心とした校内研究を充実させる。 ○着実な学力向上対策により、児童一人一人に成果が現れる。	・全学級担任が算数の研究授業を行う。 ・学力向上委員会を立ち上げ、数値的な目標を掲げ、より具体的な学力向上対策を行う。	・21年度の県数研大会校として、算数科の校内研究を充実させた。 ・全学級で算数の研究授業を行い、全学年で訪問指導を受けた。 ・県及び全国の学力テストの結果を細かく分析考察することによって、本校の弱みを明らかにした学力向上対策を行った。その成果を数値的に検証する必要がある。	A B	・6月23日の県数研大会の授業公開に向けて、万全を期す。 ・新教育課程への移行措置を円滑に行う。 ・着実な学力向上対策により、児童一人一人の成果が実感できるようにする。	・21年度の県数研大会の授業公開に向けての意欲が伺える。 ・一人一人の子供が算数の面白さ、数学への興味を実感できる指導が必要であると思う。 ・県数研大会の成功が先生の満足で終わることなく、子供達の成果につながることを期待する。	B	
ふるさと教育	地域の「ひと、もの、こと」を積極的に活用した教育活動を工夫する。	○各学年の内容について焦点化を図り、外部人材の活用を促進する。	・年間指導計画の見直しを行う。 ・外部人材による「ふるさとトーク」を実践する。 ・活動記録を残し、広く情報発信する。	・地域の「ひと、もの、こと」を積極的に活用した教育活動を工夫するという視点から、今年度の教育活動を点検すると、各学年で様々な工夫、実践があった。しかし、やりっぱなしではなく、この活動を「ふるさと教育」のねらいや目的に照らし合わせる必要がある。	B	・「ふるさと教育」のねらいや目的について共通理解を図りながら、さらに、地域の「ひと、もの、こと」を積極的に活用した教育活動を工夫する。	・地元を愛する取り組みを学校だけでなく、地域、行政が主体となって行う必要があるでしょう。 ・外部人材の情報収集をさらに積極的に進めてほしい。	B	
		①教育活動を通しての道徳実践力・人間尊重の精神の涵養。	○いじめのない学校を目指し、心に響く道徳教育を推進する。	・いじめの実態件数ゼロを目指す。 ・道徳の時間の確保と充実した指導を行う。 ・学校行事や全校活動に、道徳的な観点を持たせる。	・現時点で、いじめ対策委員会で検討した件数はゼロである。 ・道徳の時間は全学級で予定時数を確保している。 ・いじめや暴力などがなく、みんな仲良く楽しい学級であると評価しているのは63%である。	B	・新教育課程により、心に響く道徳教育を推進する。 ・いじめや暴力などに対して、正面から向き合いながら、みんな仲良く楽しい学級を目指す。	・いじめや言葉の暴力などのない楽しい学校、学級を目指してほしい。いじめにつながる行為は現状ではたくさんある。基本的に子供はいじめの要素を持っていると対応する必要がある。	B
道徳教育	生徒指導	②共感的児童理解に基づく生徒指導の充実。	○児童理解研修を充実する。 ○自尊心の醸成を目指した教育活動を工夫する。	・全児童を対象とした教育相談を定期的に開催する。 ・カウンセリングマインドの手法を生かした生徒指導研修を行う。 ・学校行事を生徒指導に生かす。 ・褒賞の機会を設ける。	・毎学期、教育相談週間を設けた。71%の児童が、先生は、こまやかなやんやんでいる時に、話を聞いてくれると回答している。 ・職員研修は、不十分であった。 ・教職員は、学校教育のあらゆる場で生徒指導を意識している。 ・自分は、先生からよくほめられると回答した児童は31%であった。	B B	・外部講師を招いて、カウンセリングマインドの手法を生かした生徒指導研修を行う。 ・自尊感情の醸成を目指した具体的な教育活動を展開する。	・子供は大人のような自己分析能力は低いと思う。 ・自分は困っているのか、悩みは何かなどの確に他人に伝えることができない子供がほとんどである。 ・指導者として、カウンセリング、観察力を身に付けることを願っている。	B B
		③教職員の共通理解・協力体制により、社会規範を遵守する態度の育成。	○朝読書の充実により、落ち着いた朝のスタートを切る。	・年間を通じた生活を目標に掲げる。 ・強化月間を設ける。 ・朝読書の時間確保に努める。 ・読書活動の工夫を行う。	・生徒指導の取り組みは充実していた。生活目標やきまりを守ろうと努力している児童は72%。 ・朝読書は定着してきた。読書好きの児童も多く成果を収めている。保護者の理解も得て、読書活動の充実が児童に好影響を与えている。	B A	・生徒指導の焦点化を図る。 ・家庭との連携を強化する。 ・朝読書の効果を検証する。 ・保護者の読書ボランティアの充実を目指す。		
		④食育・生活リズムの徹底を図り、児童の健康の維持増進を図る。	○食育、生活リズムの確立を目指す。	・児童の実態を把握し、適切な目標を提示する。 ・PTAとの共催で、元気子を育てる会を年2回開催する。	・全国一斉実施となった体力テストの結果から、本校の実態を把握することができた。ブリッジ、鉄棒、なわとびなどの体力づくりをがんばっている児童は、70%である。	B	・年間を通じて、走る力を伸ばす取り組みを強化する。 ・投げの運動に慣れさせる工夫を行う。	・体力の増進は、健康につながり、体の健康に心の健康につながる。個々に応じた体力の増進をこれからもお願いしたい。	B
豊かな情操を培う環境づくりをする。	安全管理	②施設設備の安全及び文書・備品の管理の徹底と、安全確保及び教育効果を高める。	○安全・環境に視点を置いた点検を毎月行う。 ○文書及び備品管理の工夫改善を行う。	・学校事故ゼロを目指す。 ・各学年で実態に応じた安全教育を行う。 ・毎学期避難訓練を行う。 ・PTAとの共催で救急法講習会を行う。	・安全教育は計画どおり実施できたが、校内での負傷事故、校外での交通事故が数件発生している。保護者の意識も向上してきているが、さらに児童の危険回避能力を高める取り組みが課題である。	B	・交通事故ゼロを目指す。 ・各学級で特設の安全教育を行う。 ・保護者が救急法講習会に参加しやすいような工夫をする。		
		③教育活動に資する校舎内外の言語環境の整備。	○教室や廊下の掲示について、工夫改善を行う。	・定期的言語環境チェックを行う。 ・児童や保護者にアンケートを取り、環境整備に反映させる。	・元気子を育てる会が提唱してきた『早ね、テレビ・ゲームの時間』は、着実に成果を収めてきている。 ・養護教諭や栄養教諭と連携した食や生活リズムの健康教育も充実してきている。	A	・元気子を育てる会のさらなる拡充を目指す。 ・健康教育についての実践記録をまとめ、情報発信する。		
	学習生活環境	④子どもの感性・情操を育む自然環境の創造と活用。	○「うるおい」と「ぬくもり」のある環境整備を進める。	・子どもたちにとって、「居心地のいい場所」「お気に入りの場所」を提供する。 ・中庭、ベランダ、階段、校庭周辺、玄関などを重点的に整備する。 ・自然に親しむグッズを揃える。	・子どもの感性・情操を育むという視点から環境整備を進めてきた。 ・82%の児童が、勉強したり遊んだり、気持ちよくすごすることができる学校であると回答しているが、保護者の評価は62%と低い。	A	・津宮小学校の立地条件を生かした特色ある学習環境の創造に努める。	・互いにかかわる言葉によって、知らず知らずのうちに傷つき合っているように思える。 ・校内の整備だけでなく、地域の社会教育関係者との連携も視野に入れて考慮してほしい。 ・言語環境の整備については、学年によってばらつきがある。低学年がよく工夫されている。	B
		⑤幼・保・小・中の学校種間の連携を図り、児童生徒の心豊かで健全な育成に資する。	○幼稚園との交流学習を行う。 ○小中学校教職員の相互交流の場を持つ。	・2年生は、津宮幼稚園で読み聞かせを行う。 ・1年生は、津宮幼稚園を招待して生活科発表会をする。 ・のぞみ保育園との交流を行う。 ・中学校の教員を招いて授業交流を行う。 ・江津高校英語科との交流事業を行う。	・2年生は、津宮幼稚園で読み聞かせを行った。 ・1年生は、1日入学の時、できるようになったことを発表する。 ・文芸クラブが、のぞみ保育園で交流会を行った。 ・江津高校英語科との交流事業としてわくわくイングリッシュを行った。 ・青陵中学校との連携として、授業交流を行うこととしている。	A	・幼・保・小の連携は、小学校からの積極的な働きかけによって、実現するものであるから、今後も継続できるように連絡を密にする。 ・中、高の連携は、授業交流のレベルで効果的に進める。	・適正に自己評価されている。 ・放課後児童クラブの子供達が増加してきているが、児童クラブとの連携も必要である。	A
人権教育・特別支援教育	特別支援教育	①同和教育を核とした人権教育を推進する。	○人権・同和教育に視点を当てた参観授業を行う。	・10月の参観日は、どの学級も一斉に人権・同和教育に視点を当てた参観授業を行う。	・10月の参観日は、どの学級も一斉に人権・同和教育に視点を当てた参観授業を行った。 ・82%の保護者が、学校参観日の計画や内容について満足している。	A	・人権・同和教育の視点から教育活動全般を見直す。 ・人権・同和教育に視点を当てた参観授業は、より充実させる。	・子供達に思いやりの心を大切にすることを伝えて欲しい。	A
		②特別支援学級・通級指導教室・通常の学級での個のニーズに応える特別支援教育を積極的に推進する。	○特別支援部により、推進体制を強化する。	・職員研修を充実する。 ・情報交換を適時に行う。 ・個別に支援の計画、指導の計画を綿密にする。	・特別支援部が、主体的な取り組みを行い、全職員の特別支援教育への意識が高まった。 ・障害のある人や子どもに対する理解教育について、「共に生きる教育」と位置づけ、外部講師を積極的に招くなど充実した取り組みであった。この成果は、県教研の研究論文に応募した。	B	・「共に生きる教育」のさらなる計画的な実践と情報発信に努める。 ・本校の通級指導教室、特別支援学級の特性を生かした特別支援教育の取り組みを行う。	・特別支援の実態について明らかにし、現場まかせでなく、教育委員会を中心に保護者と学校でより良い改善を期待したい。	B

自己評価については、A:十分達成 B:ほぼ達成 C:一部に課題がある D:大きな課題がある とし、アンケート結果、実績値などの数値化によって評価する。その場合、100%の達成率に対して、A:80%以上 B:60~79% C:40~59% D:39%以下とする。